

戯曲 十人の小さなインディアン

目次

戯曲 十人の小さなインディアン 5

戯曲 死との約束 149

戯曲 ゼロ時間へ 329

ポワロとレガッタの謎 501

訳者あとがき 526

解説 数藤康雄 547

登場人物（登場順）

- トム・ロジャーズ……………オーウェン家に雇われた召使
エセル・ロジャーズ……………オーウェンに雇われた召使で料理人、ロジャーズ夫人
フレッド・ナラコット……………船頭
ヴェラ・エリザベス・クレイソーン……………オーウェン家の秘書
フィリップ・ロンバード……………元陸軍大尉
アントニー・ジェイムズ・マーストン……………青年
ウィリアム・ヘンリー・ブロー……………元警察官で現探偵
ジョン・ゴードン・マッケンジー……………老將軍
エミリー・キャロライン・ブレント……………オールドミス
ローレンス・ジョン・ウオーグレイヴ……………元判事
エドワード・アームストロング……………医師

第一幕

場面・場面はインディアン島にある邸の居間。とてもモダンな部屋で、調度も豪華。日差しが明るい夕方。舞台の背景の全体に、窓から海が見える。中央のフレンチ・ドアがバルコニーに出られるように開いている。ちょうど海に向かって張り出す船の甲板のような印象を与えるべし。バルコニーの下手には椅子が一脚あり、邸に入るには、主にバルコニーの上手にある階段を上がっていく。バルコニーの下手にも階段があるが、邸は切り立った崖に接して建てられているので、それは棧橋から直接上がる階段ではなく、家のうしろにまわって上がる階段である。フレンチ・ドアは横幅が広く、バルコニー越しに広々と外が眺められる。

上手手前には、玄関ホールに続くドア（ドア1）がある。このドアの前方に呼び鈴の紐がある。上手の窓の近くに、食堂に通じるドア（ドア2）がある。

下手奥には、書斎に通じるドア。その手前には、暖炉。その上の壁には、十人の小さなインディアン（の童謡歌詞が掲げられている。マントルピースの上には、十個の陶器のインディアン人形が置いてある。正確な数が簡単にわからないように、スペースをあけずに固めて置いておく。

部屋にはモダンな家具がわずかにある。中央に二つのソファが離れて置いてある。上手奥には小さなテーブルと椅子。上手手前にはクラブチェアがあり、その右うしろ側に円い腰掛。その壁際には本

棚がある。下手奥には窓腰掛があり、マントルピースの手前にはカクテル・キャビネット。下手手前に円い腰掛。暖炉の前には、頭の付いた大きな白い熊の毛皮の敷物。中央下手寄りには肘掛椅子と円い腰掛。暖炉の手前端には四角い足台。下手奥の窓の前には、左側にテーブルのあるソファ。

幕が上がると、ロジャーズがせわしなく、部屋を整える最後の仕上げをしている。下手手前に瓶を並べている。ロジャーズは有能な中年の使用人。執事ではなく、小間使い。仕事が早く手際がいい。見掛けに似合わず、ずる賢い。かもめの鳴き声がする。モーターボートの警笛が遠くから聞こえる。ロジャーズ夫人が上手奥のドア2から登場。夫人は痩せ形で、憂鬱そうで、おどおどした感じの女性。ナラコットがバルコニーの上手から中央に登場。包みのいっぱい入った買い物かごを手にしている。

ナラコット 最初の一行がジムのボートで着くね。次の一行も間もなく来るよ。(上手の夫人のもとに行く)

ロジャーズ夫人 こんばんは、フレッド。

ナラコット こんばんは、ロジャーズ夫人。

ロジャーズ夫人 あれがそのボート？

ナラコット そうさ。

ロジャーズ夫人 まあ、もう着いちやうの？ みんな忘れずに持ってきてくれた？

ナラコット (夫人にかごを渡し)と思うよ。レモン、カレイ、クリーム、卵、トマト、バター。これで全部だろ？

ロジャーズ夫人　そうね。やることがたくさんあって、何からはじめていいのやら。明日の朝にならないと女中は来ないので、お客さんたちはみんな今日着くつて言うんだから。

ロジャーズ（マントルピースの前で）落ち着きなさい、エセル、準備万端整ったよ。見事なもんだろ、フレッド？

ナラコット　立派なもんだよ。がらんとしてるが、金持ち連中はがらんとした場所がお好きだろうしな。

ロジャーズ夫人　お金持ちって、変な人たちばかりよ。

ナラコット　あの方も、こんな所に邸やきを建てるなんて、変わり者だったしな。こんな邸にたっぷりお金をかけて、飽きるとそっくり売りに出しちまうんだから。

ロジャーズ夫人　どうしてオーウェンご夫妻がこの邸を買って島に住もうなんて考えたのか、まるでわからないわ。

ロジャーズ　おいおい、よさないかエセル、食料品を台所に運んでしまいなさい。皆さん、いつ来られるかわからないぞ。

ロジャーズ夫人　あの険しい坂道をのぼって来たら、それをお酒の口実になさるんでしょうね。みんなそんなものよ。

モーターボートの警笛が遠くから聞こえる。

ナラコット　ありゃジムのやつだな、そろそろ行くよ。車で来る殿方も二人いるらしい。（バルコニ

ーに向かう)

ロジャーズ夫人 (ナラコットに呼びかけ) 明日の朝は、せめてパン五個と牛乳八パイントほしいわ、よろしくね。

ナラコット いいとも。

ロジャーズ夫人は上手奥の床にかごを置き、ドア1から玄関ホールへ退場。

ロジャーズ (下手の窓へ慌てて向かう) 発動機用のオイルも忘れないでくれ、フレッド。明日充電しないと、電灯がつかなくなっちゃう。

ナラコット (上手に去りながら) 駅留めにしといたから、駅にある。明日一番で取りに行くよ。

ロジャーズ あと、荷物を運ぶのを手伝ってくれるかい？

ナラコット いいとも。

ロジャーズ夫人 (リストを持って登場) お客様のリストを渡すのを忘れてたわ、トム。

ロジャーズ ありがとよ。(興味深げにリストを見る) ううむ、あまりご立派な人たちではなさそうだな。(リストに目を通す) ミス・クレイソーン。たぶん秘書だろう。

ロジャーズ夫人 秘書とはうまく付き合えないわ。病院のナースより始末が悪いし、態度が傲慢だし。使用人を見下すもの。

ロジャーズ おいおい、愚痴はよしとくれよ、エセル。さっさとピカピカで贅沢な台所に行つとくれ。ロジャーズ夫人 (かごを持ち、ドア2から台所に向かいながら) なにもかも最新式すぎて、性に合わない

いんですけどね！

ヴェラとロンバードの声は舞台外から聞こえてくる。ロジャーズは出迎えのためにフレンチ・ドアの前に立つ。よく訓練された恭しい使用人になっている。ヴェラとロンバードがバルコニーの上手から登場。ヴェラは二十五歳の美しい娘。ロンバードは三十四歳の魅力的ですらりとした男。よく日焼けし、冒険家風の雰囲気がある。早くもかなりヴェラに惹かれている。

ロンバード（部屋をじろじろ見ながら、興味深げに）ほう、なるほど！

ヴェラ　なんて素敵なのかしら！

ロジャーズ　ミス・クレイソーン？

ヴェラ　あなたは——ロジャーズ？

ロジャーズ　はい。こんばんは、ミス。

ヴェラ　こんばんは、ロジャーズ。私とロンバード大尉の荷物を運んでくださいます？

ロジャーズ　かしこまりました、ミス。（フレンチ・ドアを通り上手へ退場）

ヴェラ（部屋の中央下手に行きながら、ロンバードに）以前もここにいらしたことがあります？

ロンバード　いや——ただ、この島のこと、以前から噂に聞いていたよ。

ヴェラ　オーウェンご夫妻から？

ロンバード（上手手前へ歩きながら）いや、ジョニー・ブリュワーからだ。友人で、この家を建てた

やつさ——哀しく痛ましい話でね。

ヴェラ 恋愛がらみの？

ロンバード ああ——実に悲しい話なんだ。裕福なやつだったが、あの有名なリリー・ローガンと恋に落ちて——結婚して——この島を買って、彼女のためにこの家を建てたんだ。

ヴェラ すごくロマンチックね。

ロンバード 気の毒なジョニー！ 彼女を——通信手段の電話も置かずに——世間から隔離すれば、独り占めできると思つたのさ。

ヴェラ でも、当然、美しいリリーは竜宮城生活に飽きてしまつて——逃げちゃつたのね？

ロンバード まあね。ジョニーはウォール・ストリートに戻り、さらに数百万ドル儲けて、この家は売りに出されたつてわけさ。

ヴェラ で、私たちがここにいるというわけね。(ドアから出ていこうと移動しながら) さあ、オーウェン夫人を見つけないさ。ほかの人たちもすぐに来られるわ。

ロンバード (彼女を制止して) ほかの一人を残して行つちまうなんて、つれないな。

ヴェラ あら、そう？ それにしても、夫人はどこにいるのかしら？

ロンバード 出番が来れば、いらつしやるさ。待つているあいだに(下手手前のカクテル・キャビネットのほうに顎をしゃくり) 一杯やつてもいいかい？ ひどく喉が渴いてね。(ソファの前を通つて下手手前で飲み物を作りはじめる)

ヴェラ どうぞご自由に。

ロンバード あの急な坂をのぼると、体が火照つちまう。君も飲むかい？

ヴェラ いえ、けっこうよ。飲みたくないわけじゃないんだけど——仕事中ですから。(向かつて中央

右手の肘掛椅子のうしろに行く

ロンバード 優能な秘書は決して仕事を忘れないってわけか。

ヴェラ そうよ。(部屋を見まわして) 素晴らしいわね! (ソファの前を通って中央奥に進む)

ロンバード 何がだい?

ヴェラ すべてがよ。海の香り——かもめ——浜辺、この素敵なお邸を楽しませてもらうわ。

ロンバード (微笑んで、彼女のほうに近づきながら) きっと楽しめるよ、ぼくら二人ともね。(飲み物を掲げながら) 乾杯——君は素敵だよ。

ロジャーズがスーツケースを持ってバルコニー上手から中央に登場し、中央左手前に進む。

ヴェラ (ロジャーズに) オウエン夫人はどちらに?

ロジャーズ オウエン様ご夫妻は明日にならないとロンドンから来られません、ミス。ご存じかと思っておりますが。

ヴェラ 明日ですって——でも——。

ロジャーズ ご所望でしたら、ご滞在予定のお客様方のリストはございますよ。二艘目のボートがまもなく到着します。(リストを差し出す)

ヴェラ ありがとう。(リストを受け取る。ロジャーズはドアから玄関ホールへ退場) まあ大変——ねえ、お願い、手伝ってくださいるわね。

ロンバード 君のそばから離れないよ。

ヴェラ ありがとう。(リストに目を通す。二人は下手手前に移動する)最初のボートに私たち二人だけ
を乗せて、あとの人たちを二番目のボートに乗せるなんて、おかしなことをしたものね。

ロンバード 偶然じゃなくて、わざとそうしたのさ。

ヴェラ わざとですって? どういうこと?

ロンバード これ以上の乗客を待つ必要はないって、ぼくが船頭に言ったんだ。そう言って五シリン
グ渡したら、すぐにエンジンをかけたのさ。

ヴェラ (笑いながら) まあ、そんなことしちやいけなわ!

ロンバード だって、ほかの乗客は、そう楽しそうな連中じゃなかっただろ?

ヴェラ あの青年はけっこう感じのいい人だったけど。

ロンバード 青二才さ、ただの青二才だよ。それに若すぎる。

ヴェラ 男は三十代が魅力的だと思ってるみたいね。

ロンバード 思っているんじゃない——知ってるのさ。

マーストンがバルコニー上手から中央に登場。二十三歳くらいの感じのいい青年。金持ちでお
坊ちやま育ちだが、頭はさほどよくない。

マーストン (下手手前の二人に近づきながら) 素晴らしいお邸をお持ちですね。

女主人と勘違いしてヴェラに挨拶しようとする。ロンバードは主人のような顔をして彼女の隣

に立つ。

ヴェラ（握手する）オーウェン夫人の秘書です。オーウェン夫人はまだロンドンにおられて、明日にならないと来られません。

マーストン（ほんやりと）はあ、そりや残念です。

ヴェラ ロンバード大尉をご紹介します。ええっと——その——。

マーストン マーストン。アントニー・マーストンです。

ロンバード 一杯やるかい？

マーストン ええ、ありがとう。

ブローアがバルコニー上手から登場。中年のでっぷり太った男。やや派手な服を着て、南米の金鉱王のような印象を醸し出している。すべてを記憶に刻もうとあちこちを見ている。

ロンバード 何か飲むかい？ ジン、ウイスキー、それともシェリー？

マーストン ウイスキーを。

二人は下手手前のキャビネットに向かう。

ブローア（中央下手にいるヴェラに近づき、ヴェラの手を取り、親しみをこめて握る）素晴らしいお邸をお

持ちですな。

ヴェラ 私はオーウェン夫人の秘書です。オーウェン夫人はまだロンドンにおられて、明日にならないと来られません。

ロンバード これくらいかい！

マーストン ああ、それでけっこう！

ブロア ごきげんよう。(カクテル・キャビネットに向かう)

ロンバード ロンバードと申します。一杯いかがですか、ええつと——。

ブロア デイヴィス。デイヴィスと申します。

ロンバード デイヴィスさんですか——こちらはマーストンさんです！

ヴェラは下手のソファに座る。

ブロア ごきげんよう、マーストンさん。はじめまして。ありがとうございます、ロンバードさん。いただきますよ。ここまで、けっこうな上り坂でした。(中央奥のバルコニーに出る) ほほう！ なんと素晴らしい眺め、この高さならはだ！ 南アフリカを思い出させてくれる。(中央手前に戻ってくる)

ロンバード (彼を見つめながら) ほう？ どちらを？

ブロア その——ええと——ナタール州、ダーバンですよ。

ロンバード (中央に進む) えっ？ (飲み物を手渡す)

ブロア やあ、乾杯。その——つまり——南アフリカをご存じですか？

劇作家としてのクリステイ

数藤康雄（アガサ・クリステイ研究者）

アガサ・クリステイが亡くなったのは1976年1月。すでに死後四十年以上経っているものの、クリステイが「過去の人」とは、到底言えないだろう。中規模以上の書店に行けば赤表紙のクリステイ文庫が何十冊と並んでいるし、テレビのゴールデン・タイムでは彼女の原作『パディントン発4時50分』や『鏡は横にひび割れて』、『アクロイド殺し』の翻案ドラマが放映されるほどの人気があるからだ。

英米でも似たようなもの。アメリカでは昨年（2017年）ケネス・ブラナーの製作・監督・主演による映画「オリエント急行殺人事件」がヒットし、「ナイル殺人事件」も製作される予定とか。さらに本国イギリスでは、上演回数の世界最長記録を毎日更新している劇『ねずみとり』が六六六目に突入しているし、クリステイ劇の最高作『検察側の証人』が何回目かの興行をロンドンのCountry Houseで実施したところ、これが大盛況。2017年10月に始まって2018年の3月に終了する予定が、役者を入れ替えた第二陣の投入で2019年3月末まで延長されたのである。

もちろんこのような現象は、クリステイのひ孫ジェームズ・プリチャードが精力的に展開している著作権ビジネスの成果であろうが（ちなみにクリステイの著作権は2046年に切れる）、クリステ

イ作品の魅力が今でも現代人に十分通じるからこそ可能となるのであろう。

本書は本邦初訳の二本の戯曲『死との約束』と『ゼロ時間へ』、そして新訳『十人の小さなインディアン』からなるクリステイの戯曲集である（さらにポーナスとして単行本未収録のポワロ物短編一本を含む）。文庫本で百冊近くの翻訳書が出ているのに未訳作品がまだあるのかと驚く読者もいるが、クリステイは若い頃より戯曲に関心を持っており、調べてみると未訳の戯曲は思いのほか残っていることが分かった。本解説では未訳・既訳にとらわれず、クリステイが創作した戯曲と彼女の原作を他の人が脚色した戯曲のすべてを紹介し、劇作家クリステイの実績を考えてみよう。

なお本稿を書く上では、ジャネット・モーガン著の『アガサ・クリステイの生涯』（早川書房）を始めとしてさまざまな著作を参照したが、一番頼りにしたのはJulius Green 著の“Curtain Up” (HarperCollins2015) である。この原書は“Agatha Christie A Life in the Theatre”という副題からわかるようにクリステイ戯曲の研究書で、主にA C A (The Agatha Christie Archive) の膨大な資料を丁寧に調べて書かれている。ここで注釈を加えるとA C Aとは、クリステイが書いた原稿やメモ類はもちろん、クリステイが出した手紙のコピーや届いた手紙、契約書類などを保管しているアーカイブ。現在はChristie Archive Trustが管理しているが、私が昔クリステイに送った五通のファンレターさえも保管しているようだ。というのも、ジョン・カランがA C Aの資料を参照して書いたクリステイの研究書“Murder in the Making” (2011) の中に、私の手紙に対するクリステイの返事（内容はクリステイ自選ベストテンが書かれている）を引用しているのを見つけたからである。私のファンレターがクリステイ研究に多少とも貢献していたとは、まさにファン冥利につきると言うべきか。

A C Aの話はさておき、以下のリストは、クリステイが関与したすべての戯曲を執筆年代順に並べ

ている。ただし草稿だけ残っていて、初演記録も脚本出版もない戯曲は除いている。また当時のイギリスの演劇界では、まず地方巡業を行って出来栄えを判断し、修正を加えて最後にロンドンのウエスト・エンド地区で興行するのが一般的なようである。そのため初演については、ロンドンでの初演日だけでなく、可能な限り地方での初演日も追記した。地方とロンドンでの初演日の差が大きい戯曲は、地方での上演が不評なために手直しに時間が掛かり、ロンドンでの上演が遅れた戯曲と考えられる。さらに脚本（原書）の出版は原則として最初の版を、翻訳については入手しやすい直近のものを掲載している。

(1) "Alibi" (別題 "The Fatal Alibi") (1928)

初演：1928年5月15日、ロンドン

内容：『アクロイド殺し』(1926)をマイクル・モートンが脚色した作品

原書：Samuel French (1929)

翻訳：『アリバイ』（長沼弘毅訳、早川書房、1954）

付記：ベストセラー『アクロイド殺し』に注目したある劇団マネージャーが1927年4月に戯曲化

の権利を買い取り、ベテラン脚本家のマイクル・モートンに脚色を依頼して実現したものの。初代のポワロ役者は若き日のチャールズ・ロートンだが、その彼が後年クリステイの傑作映画「情婦」にも弁護士役として出演しているのは因縁めいて面白い。ロンドンなどでの総上演回数数は二五〇回に達し劇は成功といつてよいが、クリステイは、ポワロが若い女性に魅かれ

るなどの人物描写には失望したようだ。さらに原作に登場するお気に入り（語り手の姉）が除外されたことも不満で、このことがキャララインの性格を引き継ぐミス・マーブルの誕生につながったようである。

(2) “Black Coffee” (1930)

初演：1930年12月8日、ロンドン

内容：クリステイのオリジナル脚本

原書：Alfred Ashley (1934)

翻訳：『ブラック・コーヒー』（麻田実訳、早川書房文庫、2004）

付記：クリステイ自身が脚本を書き上げて上演まで漕ぎ着けた最初の劇。当時の人気俳優フランシス・L・サリヴァンがポワロ役を演じたこともあり、ロンドンのウエスト・エンドでの上演は六七回を数え、二カ月以上の興行となった。クリステイがオリジナル脚本を書いた理由は、間違ひなく『アリバイ』の出来に不満があったことが一因だが、それ以上に若い頃から戯曲を書きたいと思いつけてきた創作意欲が表出した結果であろう。というのも、クリステイはすでに十代で「不運な青髭」という素人劇団向けの戯曲を書いているし、その劇に出演したハーレム・パンツをはいた美少女クリステイの写真も残っているからだ。

また前述のA C Aには、正確な時期は特定できていないものの、二十代に書いたと考えられる戯曲が八作ほど残されている。題名だけを記すと“*The Conqueror*”, “*Teddy Bear*”, “*Eugenia and Eugenics*”, “*The Clutching Hand*”, “*The Last Séance*”, “*Ten Years*”, “*Marmalade Moon*”,

〔著者〕

アガサ・クリステイ

1890年、英国デボン州生まれ。本名アガサ・メアリ・クラリッサ・ミラー。別名義にメアリ・ウェストマコットなど。1920年、アガサ・クリステイ名義で書いたエルキュール・ポワロ物の第一作「スタイルズ荘の怪事件」で作家デビュー。ミステリを中心に幅広い分野で長きに亘って活躍した。76年死去。

〔編訳者〕

淵上瘦平（ふちがみ・そうへい）

元外務省職員。海外ミステリ研究者。訳書に、ヘレン・マクロイ『あなたは誰?』『二人のウィリング』、R・オースティン・フリーマン『オシリスの眼』（以上、筑摩書房）、J・J・コントトン『九つの解決』、ジョン・ロード『代診医の死』（以上、論創社）など。

じゅうにん ちい ぎきょくしゅう
十人の小さなインディアン アガサ・クリステイ戯曲集
——論創海外ミステリ 210

2018年6月20日 初版第1刷印刷

2018年6月30日 初版第1刷発行

著者 アガサ・クリステイ

編訳者 淵上瘦平

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1722-4

落丁・乱丁本はお取り替えいたします